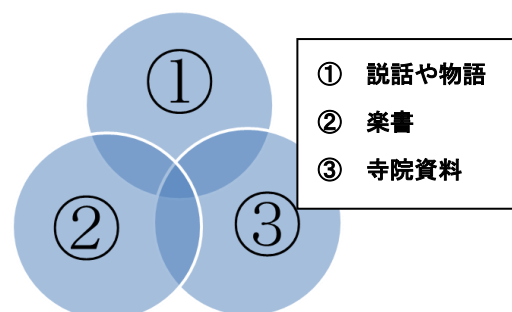


|       |                               |
|-------|-------------------------------|
| 研究課題  | 中世楽書にあらわれる仏教思想の基礎的研究          |
| 研究代表者 | 由井 恭子<br>(教育開発推進センター 任期制専任講師) |

## 1. 研究目的

中世文学における芸能研究には、右図のように大きく3分野に分けられる。①は「説話や物語」、②は「楽書」、③は「寺院資料」である。

近年、中世芸能に関する研究は、特に①③分野で多角的にかつ急速に進められている。具体的には、二松学舎大学の磯水絵氏による中世芸能説話に関する研究(①)、申請者による『平家物語』における芸能関連説話の研究(①)、名古屋大学の阿部泰郎氏による数々の寺院調査と報告(③)、山田昭全氏、清水宥聖氏による貞慶の講式集の出版(③)、金沢文庫による東大寺僧弁暁草の願文の出版(③)などがあげられる。このように、近年においては、中世文学における芸能関連説話、中世における音楽を含む仏教儀礼の実状が、明らかにされてきている。



いっぽう、少しずつではあるが中世芸能における基礎資料、楽書『教訓抄』や『続教訓抄』『体源抄』など、楽書についての研究も進められている。楽書は楽人自ら筆をとり、芸能の由来や演奏方法などを、子孫のために詳細に記したものであり、今後さらなる研究が求められる分野である。また、演奏者自身によって作成されたものであることも、音楽に関する記述の信憑性も高いと考えられる。宮中での儀式、大寺院における法要での楽人の役割や、楽家が伝承している秘曲にまつわる伝承に関しても分析する価値があると考えられる。

本研究の目的は、主に以下の3点である。

第一の目的は、主として『教訓抄』を中心とする楽書に描かれた、楽人たちの仏事に関する知識を明らかにする。

第二の目的は、『教訓抄』を中心とする楽書に描かれた、楽人たちの仏事への参加形態を明らかにする。

第三の到達点は、『教訓抄』を中心とする楽書に描かれた、楽人たちの信仰の様子を

第三の到達点は、『教訓抄』を中心とする楽書に描かれた、楽人たちの信仰の様子を

明らかにする。

中世の芸能において、歴史的背景を考察する際には、まず公卿日記などの歴史史料から調査を開始するのが一般的である。そこで、ある程度の結論を導くことができれば、学問的な歴史的事実として認定される。したがって、多くの研究者の目は楽書まで届いていないのが現状であるといえる。このように本研究は、これまであまり注目されることが少なく、かつ、資料的価値の高いと考えられる、楽書に着目した研究である。

## 2. 研究方法

研究方法としては、以下の手法をとった。

### 1) 『教訓抄』を中心とした楽書における仏教的場面の抽出

『教訓抄』に描かれた仏教場面、仏教音楽に関する部分を抽出する。

### 2) 『教訓抄』を中心とした楽書に描かれた仏教場面、 仏教音楽の類話調査

『教訓抄』における仏教場面の、出典、類話を調査する。

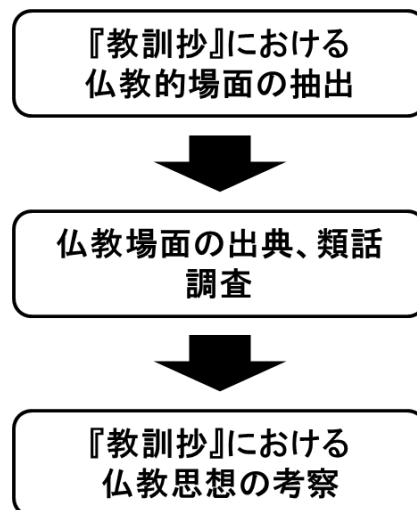
### 3) 『教訓抄』を中心とした楽書における仏教的思想を 考察する。

1)、2)の調査をもとに、『教訓抄』を中心とした楽書に描かれる楽人たちの仏事に関する知識、仏事参加形態、信仰の様子を明らかにする。また、楽人たちが大切にしていた仏教的思想を考察する。

### 4) 南都楽所の実地調査

興福寺や春日大社には、平安時代から伝統的に守られている行事や祭りが多く残されている。そこで、現在の南都楽所を実地調査し、中世楽書と比較し、現状と以前の儀礼方法の変化などを検証する。

1)～3)の具体的研究方法としては、『教訓抄』の仏教関連記事の精査、出典・類話調査など基礎的データを収集する。出典調査は、『大正新脩大藏経』などに載る教典類や、安居院や弁曉草などの中世の説教に関わるテキスト、『平家物語』『御伽草子』『古今著聞集』『十訓抄』『梁塵秘抄』『梁塵秘抄口伝集』などの、中世を代表する文学作品、『続教訓抄』『体源抄』、藤原孝道などの記した楽書、そして、宮内庁書陵部に残されている『伏見宮旧蔵楽書集成』、年次が判明するものに関しては、公卿の日記など、記事に関連しては、日本文学の分野にとどまらず、仏教や歴史などの周縁分野の基礎データを収集する。その基礎データをもとに、楽人の仏事参加状況や信仰の



実態を明らかにしていく研究方法である。

4)の具体的研究方法は、興福寺の常楽会(涅槃会)実地調査である。南都楽所は、現在においても、奈良で活躍している現役の楽所である。中世に、三方楽所と呼ばれるようになった楽所には、大内楽所、南都楽所、四天王寺楽所があげられる。大内楽所は、京都を中心に活躍した正当な楽所であるが、応仁の乱で壊滅的な打撃を受け、当時の隆盛を取り戻すには、至らなかった。南都楽所は、現在の奈良県、興福寺やを中心に活躍した楽所である。また、四天王寺楽所とは、大阪四天王寺を中心に活躍した楽所である。これらの楽所は、長い歴史の中で、多くの戦乱に見まわれた。そのなかで、南都楽所や四天王寺楽所は、現存しさらに歴史を刻んでいる。本研究では、楽書作成に関連の深い南都楽所の調査を実施した。また、現在南都楽所が携わる、祭りや儀礼の中で、『教訓抄』に当時の記録が残る、興福寺の常楽会(涅槃会)を実地調査することとした。

### 3. 研究成果と公表

研究方法にのっとり、その成果を報告していきたい。

#### 1) 『教訓抄』を中心とした楽書における仏教的場面の抽出

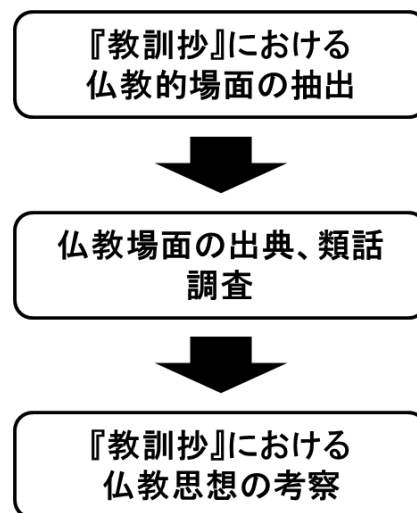
『教訓抄』に描かれた仏教場面、仏教音楽に関する部分を抽出する。

#### 2) 『教訓抄』を中心とした楽書に描かれた仏教場面、 仏教音楽の類話調査

『教訓抄』における仏教場面の、出典、類話を調査する。

#### 3) 『教訓抄』を中心とした楽書における仏教的思想を 考察する。

1)、2)の調査をもとに、『教訓抄』を中心とした楽書に描かれる楽人たちの仏事に関する知識、仏事参加形態、信仰の様子を明らかにする。また、楽人たちが大切にしていた仏教的思想を考察する。



まず、1)の『教訓抄』の仏教場面の抽出は、おおむね終了した。

2)の『教訓抄』における仏教場面、仏教音楽の類話調査では、類話調査は実施したが、楽書以外での類話はほとんど見つからないことが分かった。もちろん、京都でも奈良でも同じ楽曲が演奏されていたので、京都に住んでいた公卿の日記にも、同じ音楽(曲目)に関する記術は見られるが、その内容は重なるところは少なかった。

これにより、『教訓抄』など楽書に残されている仏教の伝承は、楽人たち独自の伝承である可能性が高いと考えられる。歴史史料や、中世芸能説話の世界と、深く関わ

っているとは考えにくい。

3) 『教訓抄』を中心とした楽書における仏教的思想を考察するにおいては、楽人の仏教思想について言及される記述はほとんど見られなかった。仏教に関する記述としては、どのような法要でどのような音楽が演奏される可能性が高く、楽人としてどのような振る舞いをしなければならないかの指導的記述が中心であった。楽書が、楽人の(秘曲を含む)口伝を親から子へ伝えるのが目的で編纂されたものであることを考えると、当然の結果かもしれない。

しかし、新たな発見もあった。楽書には、楽人の仏教思想についての記述は見られなかったが、仏教伝承に関しては、さまざまな興味深い話が残されていた。1)、2)でも報告したが、これらの仏教伝承は楽書独自のものが多く、京都の公卿日記や、文学作品とは異なる伝承を含んでいると考えられる。今後さらに考察していきたいと考えている。

つぎに、4)南都楽所の实地調査について述べる。

南都楽所は、大内楽所、四天王寺楽所とならび三大楽所と称されていた。大内楽所が、応仁の乱で壊滅的打撃を受けてからは、日本雅楽を支えていた基盤的存在ともいえる。藤原氏にゆかりの深い、興福寺や春日大社を中心とした、奈良近辺寺院の法要や祭の演奏に、古くから携わっていた由緒ある楽所である。それと同時に、興福寺や春日大社には、平安時代から伝統的に守られている行事や祭が多く残されている。したがって、現在の南都楽所を实地調査することにより、中世楽書の記述を比較検討することが可能である。

今回の調査には、『教訓抄』にその記述が散見される、興福寺の常楽会(涅槃会)を選んだ。興福寺の常楽会(涅槃会)は、平安時代から続く興福寺の伝統的行事である。他の寺院の涅槃会と異なることは、数日に及ぶ大法要で、舞楽などの音楽の演奏が長時間にわたりなされたことである。当然のことながら、その音楽的面を請け負ったのは、南都楽所の人々であった。

現在は、毎年2月15日、1日のみの法要に短縮されているが、今回の調査により、そのなごりを拝見することができた。まず、本堂正面に涅槃絵が飾られた。その絵の正面に導師、左右の脇に5名ずつ、合計11名の僧侶によって法要が執り行われた。南都楽所の楽人は8人参加し、演奏を担当していた。打楽器3名、箏1名、横笛1名、琵琶1名、笙1名、箏の琴1名であった。涅槃会は、入場、三礼、着座、唄、散華、舍利三段講式、舍利和讃、釈迦念仏、法華経如来寿量品、舍利礼、退場の構成で執り行われた。今回の調査で、舍利講式や、舍利和讃が、現在においても演奏され歌われていることが分かったことは大きな成果である。また、南都楽所の楽人は、僧侶とは異なる扱いであることも、着座の位置や入場の順番に見てとれ注目される。

また、この法要には近隣に住む方々が、熱心に参詣されているのも印象的であった。興福寺といえば、藤原氏の氏寺として、非常に高貴な存在であったが、明治初期の廃

仏毀釈の影響で、その勢力はかなり衰えたといえる。現在では、地域のコミュニティーには参加しているようで、近隣の人々により、深く信仰されている様子を知ることができたのも実地調査の成果である。

中世に書かれた楽書を紐解きながら、現在の様子と比較することにより、中古中世時代とかわらない法要の様子を想起することも可能であろう。

これらの研究の一部は、2016年9月に開催された仏教文学会大会において、『平家物語』における経正説話」として口頭発表を実施した。今後も口頭発表、論文投稿を続けていく予定である。